ませんが、私は其の護りとなつてゐる煙の中に、東京で歡待を享ける前兆を讀み得たに違ひありません。勿論斯程遠い將來を知つた筈もなく、唯大戰の終結が近づくのを待つて、印度に行くことのみを想像してゐたのであります。之は印度考古學會の招聘に應じて、自身の仕事として、サンチーの古彫刻、アヂャンターの壁畫を調査する爲であつたのであります。それで、印度からペルシアへ、次いでアフガニスタンへ、更に日本にまで來るとは、殆んど夢にも考へなかつた所で、之こそ、年來の宿願ではありましたが、今生で果されやうとは思ひも掛けなかつたのであります。

日本は、私が、行きたいと兼ねて夢想してゐた究極であり、佛教美術が頂點まで榮えた、この島國までたどり得た奇緣に與つた事は、實に感謝に耐えざるものと思ひます。然し、その事情を考へれば、この奇緣は、實に諸氏に負ふものと信ずるのであります。即ち、日佛會館の東京及びパリ委員會に負ふのでありますから、諸氏に、凡て感謝しなければならないのであります。諸氏あり、諸氏の事業があればこそ、私は無二の機會を得た譯であります。